

欧米の温泉治療と日本の温泉治療

杉 山 尚

(東北大学医学部温泉医学研究所
東北大学医学部附属病院鳴子分院)

(第14回日本温泉科学学会大会特別講演)

昨年8月22～26日ワシントンの第3回国際物理療法学会、9月21日～25日チェコ・ピースタニー温泉で開かれたチェコ・リウマチ学会、10月14、15両日西独ドリブルグ温泉におけるドイツ・リウマチ学会及び10月21、22両日ジュネーブで開催のスイス温泉物療学会に出席して、夫々「杉山式漸温部分浴装置による高血圧の治療」、「日本におけるリウマチ治療の現況」及び「日本における湯中り」なる学術講演をするかわら、欧米における温泉治療、リウマチ、物理療法に関する研究を視察し、米国に1ケ月半、ヨーロッパに4ケ月余り、約半年を過した。

アメリカの温泉はニューヨーク州北部のサラトガ温泉を訪ねただけで、主としてレハビリテーションとリウマチ方面をみただけだが、予想通りアメリカには本当の意味の温泉治療は殆んど行われていないし、温泉医学の研究もないといつてよい。ヨーロッパでは西独のネンドルフをふりだしに、テルツ、ピースゼー、ドリブルグ、バーデンワイラー、デュルハイム、ウイルドバード、クロツチンゲン、ベリンゲン、バーデン・バーデン、ウインベン、メルゲントハイム、オルブ、エムス、ナウハイム、ノイナル、ウイスバーデン、ピルモント、オーエンハウゼン、ザルツワフェルンと大小20の温泉地、更にチェコでは有名なカルルスバード(チェコではカロロビーバリーといっている)とピースタニー、オーストリーではガスタインとイシユール、スイスではバーデン、フランスではエックス・レバン、イタリーではアクイ等をみて廻つた。私の滞在が主として西独であつたため、ドイツが主となつたし、ドイツでは丁度10月9日から14日まで南独ガルミツシュ・パルテンキルヘンで第56回ドイツ温泉協会総会が開かれ、それに出席することができたので、主としてドイツにおける温泉事情を中心として、私の見聞と感想をお伝えしてみたい。

× × ×

温泉地の組織、あり方をのべる前にドイツ温泉協会について説明する必要がある。というのは、ドイツでは温泉協会が極めてよく組織され、あらゆる温泉地、療養地を包含し、これを指導しているからである。現在の会長は Dr. Dr. E. Rütten で、ドイツでは珍らしい私有温泉ノイナルの所有者であり、Kurdirektor でもある禿頭長身の紳士である。ノイナルを親子3代に亘つて私有し、経営している名門であり、経済学、農学の2つの学位をもつていることも珍らしい。ドイツ温泉協会は4つの部門から成つている。Aは温泉経営の部会即ち Kurdirektor (温泉事務所長)の部会、Bは温泉医の部会、Cは温泉気候医学、化学、地質学等の科学者の部会、Dは温泉療養地協会である。私は会長の Rütten 氏及びネンドルフ国立温泉研究所長でCの代表者でもある Evers 氏の要請でガルミツシュの総会に出席し、9日午後8時からの開会式で日本温泉協会学術部委員の資格で祝辞を述べた

× × ×

温泉の社会的活動が温泉経営と温泉科学とに2大別されることは、洋の東西を問わず自明の理であ

るが、結論からいえば、ドイツではこの間の理解と結合とが非常に緊密に行われているということが言える。これは社会のあり方、経済的事情にもよることであろうが、何にもましてドイツ人そのものが、あらゆる点で科学的であり、科学的基盤のない事業は決して長く発展しないことをよく知っているからである。事実、メルгентハイム温泉事務所長ダイゼンロート氏との会談中に、彼は私に「温泉医の協力のない温泉事業経営はあり得ない」ということを言ったが、私に対する多少のお世辞があるとしても、私の心を強く打つたものとして、忘れることが出来ない。従つてドイツにおけるあらゆる温泉地の活動は、この両者の密接な連繫からなりたつている。

× × ×

温泉地には必ず温泉事務所 (Kurverwaltung) があつて温泉事業の管理事務、経営、施設、会計等すべての運営面を司り、温泉事務所長 (Kurdirektor) が指揮している。また独立した完備した温泉治療所 (Kurhaus) をもつてこの管理をもしている。

一方、温泉地には必ず温泉医がいて温泉治療所と密接な連絡をとりつつ湯治客 (Kurgäste) の治療上の指導をしている。稀には温泉医自身が多少の温泉治療施設をもっていることもあるが、これは寧ろ例外で温泉事務所の治療施設にくらべると問題にならない。温泉治療所では温泉医の処方をもつてこなければ入浴も飲泉もその他の温泉治療もしてくれない。又温泉治療所にはその土地の温泉医の名前を表示している。

温泉地には勿論、湯治客のために沢山のホテル (特に Kurhotel という) Kursanatorium Pension Gasthaus 等があり、温泉事務所直属の Kushotel をもっている所もある。しかしこれらは、原則として温泉をもっていないし、温泉治療も行わない。従つて湯治客は温泉地に来てホテルに旅装をとくと先づ温泉医を訪れて診療をうけ温泉治療の処方をもつて温泉治療所に行つて入浴、飲泉、吸入その他の特殊治療浴を行い、時々温泉医の監視と指導をうけることになる。

温泉事務所も国立 (国立といつても西独では州立といつた方がよいかも知れない) 協同体立、町立公立、私立など種々の種類があり、従つて Kurdirektor の身分も様々であるが、いづれにしても温泉地および温泉事業における勢力は非常に強いようだ。時には町長が兼務している所もある。その所管の温泉治療所の設備はもちろん温泉地の大小によつて異なるが、一般に非常に完備した立派なもので、治療所自身研究をかねた温泉医をもっているところもあるし、大学の温泉研究所と連繫して研究を兼ねた指導医をもっているところもあり、大学の温泉研究所と連繫して研究を兼ねた指導医を派遣してもらっている所もある。その温泉治療施設そのものは大学の温泉研究所の附属施設よりは遙かに完備している。温泉事務所はこの温泉治療所の外に、多くは療養、ホテル、劇場、飲泉所、野外及び屋内コンサート、広大な遊歩公園、レストラン、レクリエーション用軽スポーツ等を経営している。湯治客は湯治期間中、これらの施設を利用するため温泉事務所で、一定の料金を支払うわけである。

× × ×

温泉地には必ず温泉医 (Badearzt) がいることは前にのべた。これはドイツ温泉協会が年1回約4週間の講習会を行つて、このクルズスを終了したものに与えられ、温泉地の開業医の看板には必ずこれが表示してある。最近ではギーセン大学ナウハイム温泉研究所 (所長 Ott 教授) でこの講習会を開いているようである。前述のような湯治組織のために、温泉地で温泉に入り、また飲泉をし、公園その他の療養施設を利用するためには、どうしても温泉事業所と温泉医の御世話にならなければならない。日本のように各ホテルに内湯があつて湯治客が医学とは無関係に勝手に湯治をしているようなこ

とは全くみられない。従つて温泉地の医師は温泉医の資格を得て、一応温泉治療の概念と治療手技（例えば泉浴、浴中マッサージ、炭酸気泡浴、酸素気泡浴、酸素ガス浴、電気浴、ゾール浴、クナイプ浴、各種圧注、部分浴、鉍泥浴及び纏絡、運動浴、各種電気浴療、マッサージ及び機能回復訓練療法等々）を心得て、湯治客に温泉治療処方箋を交付し、どんどん温泉治療地に送っている。もちろんその間、レントゲン、血沈、EKG等必要な臨牀検査をして湯治客を指導している。ただドイツでは、これらの温泉治療がほとんど社会保険に適用になつており、ドイツ国民は何週間かの間は社会保険によつて温泉治療がうけられる。従つて一般には温泉地は夏期の保養期には私費の療養保養が多くシーズン・オフの秋冬には保険による湯治客が多くなるのが、西独温泉地の実態になつている。このことがドイツの温泉治療の発達と普及に大いに役立つことは見逃せない。数ヶ所の大学が温泉医学研究所をもち、温泉医学が立派に学問的にも認められ、且つ国民大衆の大部分が湯治という医療行為を行い、しかも厚生省自身が全国数ヶ所の温泉地に温泉治療を主とする温泉病院を真営しているに拘らず、未だに社会保険の中に温泉治療がとり入れられていない日本の現状は甚だしい時代錯誤と言わざるを得ない。1日も早く温泉医学の研究の実態と効果の実際を認識して、社会保険の中に温泉治療がとり上げられ、湯治が国民の医療となることが必要であるし、このためには私共研究者はもちろん、温泉治療の実際に当たっているもの、温泉業者自身の一体の努力が必要である。

× × ×

これがドイツにおける一般の湯治の方法であるが、温泉地には屢々国立、公立または私立の温泉研究所をもつている所もある。こゝにも研究を行うために温泉治療所と同様の温泉治療を行つている。温泉研究所にはミュンヘン大学やフライブルグ大学のように温泉のない大学所在地にあるものもあるし、ギーセン大学、マールブルグ大学のように大学の研究所をナウハイム、オルブ等の温泉地にもつているものもあり、またネンドルフ、ピルモント、ザルツウフェルン、オーエンハウゼン、クロツチンゲンなどのように温泉地に国立、温泉事務所立、私立の温泉研究所をもつている所もある。

しかし驚いたことには温泉研究所の規模は比較的小さい。古い歴史をもつミュンヘン大学の温泉研究所でも、新しいフライブルグ大学の温泉研究所でも、至つて小さく病室をもつていない。ただギーセン大学のナウハイムの温研だけが日本の各大学の温研と同様に研究部門と臨床部門をもち、しかも目下大規模な新築をしている。その他の国、公、私立の温研も、その人的構成の面でも、建物施設の点でも、その規模は至つて小さい。実際には人や施設の面で温泉事務所の援助を受けていることも多いようだ。結局は温泉事務所経営の広大な温泉治療所とクール、ホテルとを病室として利用し、研究所は単に温泉治療の基礎的研究をしているようだ。事実、ミュンヘン大学温泉研究所長 Braunbehrens 教授は放射線医学者、フライブルグ大学温泉研究所長 Gipfert 教授は生理学者で夫々その下に Dr. Schnelle や Dr. Schmidt-Kessen などのような臨床家を配置しているに過ぎず、これらの温泉臨床家はいずれも病床をもつていない不合理をかこつていた。ザルツウフェルンの Zörkendorfer 教授、オルブの Dr. Hildebrandt、オーエンハウゼンの Dr. Gotlieb 等いずれも生理学者であることも面白い。

吾国の温泉研究所はいずれも臨床家が主宰し、病床をもつて研究に従事していることと比較して誠に興味深い。このことに関しては私も大いに疑問をもち、Schnelle、Gipfert、Schmidt-Kessen等に反問もしたし、また多くは、この点を認めて日本の温泉研究所のあり方に共鳴し、うらやましがつてもいた。そしてギーセン大学のナウハイム温研などは全く日本と同じ行き方を志しているように思われる。

研究の内容も、質量共に、日本における温泉の医学的研究は決して劣つていないようだ。私の目に

は寧ろこれを凌駕しているときえ思える。このことは決して私の自画自賛ではなく、私の会った多くのドイツ温泉医学者が、私との会談の後に共通して認めてくれた事実でもある。ただ言葉の関係で日本における研究が充分彼等に伝わっていないことは事実であり、吾々研究者は是非とも独語又は英語で吾々の研究を伝えるべきことを強く感じた。

× × ×

以上の所説から明かのように、西欧における温泉地は全く療養地、静養地であり、よい意味のレクリエーションの地でもある。湯治客は入浴を行い、飲泉コップを持ちながら遊歩公園をゆつくりと散歩し、きれいな花園をながめ、コンサートを聞き、一日をゆつくり楽しんでいる。日本の湯治場の様相とはおよそ別世界である。温泉事務所自身、温泉地の「静かさ」保持に最大の注意を払い、温泉地の入口にはすべて「静かに、(Bitte Ruhe! 又は Pst)」という立看板が立っているし、デュルハイム温泉等のように自動車の迂回路をわざわざ町の費用で作って所さえある。また温泉地の衛生保持のため多額の費用を出して農家を町から少し離れた所に移した所さえある。最近日本の各地に温泉ヘルスセンターと称するものが続出している。あるいはこの Kurhaus を日本式に真似たものかも知れないが、これは全くヘルスセンターとは言われない。むしろレクリエーション・センターと言うべきだろう。

× × ×

結論的に言えば、日本の温泉医学の水準はかなり高く決しておこなわれているとは思われないが、温泉経営が非常に非科学的でおこなわれているということになるようだ。つまり「温泉の科学的研究」は左程遜色はないが、「温泉の社会活動面」が全く非科学的で、この間に何んのつながりもなく全く分離していると言うことができる。

しかし、そのよつて来たる所をよく考えてみると、いろいろの原因があるようだ。国民性の相違、政治の貧困、経済事情の差異等もあげられよう。しかし最大の原因は温泉を科学的に利用しようとし点にあらう。即ち政治の要路にある人も医師も湯治客も温泉業者も、すべての人が温泉を科学的に利用しようとし点にある。日本人の科学性の欠如ということは、ドイツ人に比して残念ながらあらゆる分野で認めざるを得ないように思われる。

温泉医学者自身も単に研究のみに走つて一般の人々を理解させ、指導しようとし点もあげられよう。つまり温泉医学者が、その研究によつて温泉の高い治療価値を科学的に証明しているに拘らず、これをすべての人に周知させ、更にはこれを経済価値にまで進展させようとする努力がなされなため、一般の人々は、未だにこれを認識せず単なる遊興の具に供している所にある。

ドイツ人温泉に対する考え方は、これとは全く異なり、治療、療養及び静養に徹しており、つよくその医学的根拠を信じている。事実、私が温泉地を廻つたのは11月の晩秋の候であつたが、寒々とした気候にも拘らず、午前9時から11時迄、午後3時から5時までの飲泉ホールの開場をまつて湯治客が一せいにどこからともなく集まり、熱心に目盛付けの飲泉コップを持ちながら、既に枯木になつた遊歩公園をゆつくり歩きながら三々五々飲泉している。私は度々これらの湯治客をつかまえて、病状、経過などを聞いたが、その熱心な療養態度に深い感銘を受けた。

× × ×

またその原因は日本には余りにも温泉が多い点にもあらう。確かに1200をこす温泉地をもち、12000以上の温泉をもつ日本は世界一の温泉国である。ドイツの温泉学者も温泉業者も全くそこには驚いて

いる。私の住む鳴子温泉が100以上の源泉と7種類の温泉をもち、大部分が90度以上の温泉であることを話すと、ちよつとドイツ人には理解できないようだ。ドイツ第一のバーデン・バーデンでさえ、泉温67度、7つの源泉があるだけ。有名なメルгентハイムは17度で僅かに3つの源泉。おそらく日本人にはこれまた想像外のことであろう。このように温泉の多いことから、却つて温泉を粗末にする原因になつており、温泉の医療価値さえ軽視する結果となつている。このことは温泉の管理の面にも現われ、ドイツでは立派な建物と金色さん然たる金具で厳重に管理されており、日本における最近の各地の源泉の乱掘と御粗末な管理とはいさゝかあきざるを得ない。

しかし私は徒らにドイツの温泉経営、温泉のあり方をうのみにする考えは毛頭ない。

ただ、このようなドイツの温泉のあり方を具さにみて何んとか日本に適した温泉地のあり方を作り上げ、科学的基礎の上に立つた温泉地の姿をつくり、温泉地の長い将来の発展を期したいと思うだけである。温泉そのものも、湯治の方法も、洋の東西では全く異つている。日本には日本なりの湯治と温泉経営があつてよいし、また温泉地のあり方そのものにも、日本なりのあり方があつてよい。

厚生省でも遅ればせながら国民温泉を指定している。日本における温泉地のあり方が、余りにも無軌道になることを考え、一部の温泉を国民保健のため残したいと考えたわけである。私は彼等の温泉を考え、何とかこの国民温泉を科学性のある、しかも日本人に適した温泉療養地に育てたいと考える。しかし日本人の科学性の欠如は、この折角つくつた国民温泉さえも又もとの本阿弥にかえらうとするきざしがみえる。由来、日本人は作る時は熱心だが、これを完成することは不得手である。熱し易くさめ易い欠点の現われといえよう。そのためには国民温泉に指定された温泉でも、これが国民温泉として資格をはずれたならば、どしどし指定を取消すだけの勇氣と決断を切に望みたい。このことによつて始めて国民温泉の正しい発展が望まれるし、温泉の多数国民の正しい静養の場とすることも可能であろう。